

第3回研究例会

概要

本研究例会では、喫緊の課題である KU-ORCAS デジタルアーカイブの充実に関して、具体的な提案がなされた。

KU-ORCAS デジタルアーカイブは、関西大学総合図書館と KU-ORCAS をリソースとして資料の画像と書誌情報を公開している。貴重な資料も多く含まれており、画像の公開は知的財産の共有に貢献しているといえるが、テキストデータが付与されれば、本アーカイブはより意義深い存在となりうる。この理念のもとに、テキストデータとリンクしたデジタルアーカイブをいかに構築すべきかは、本研究班にとって最重要の課題のひとつである。

本研究例会では、本学総合図書館増田渉文庫所蔵されている、増田渉書き入れ資料のテキスト化の実現に向けて具体的な「増田渉文庫蔵・魯迅関係資料の TEI によるテキスト化プロジェクト」構想が示された。同時に、増田渉書き入れ資料の読解とテキストデータ作成を、研究班で取り組むべき共同研究のテーマとして位置づけることが確認された。また、進行中のテキスト化の具体例や今後のテキスト化の目標等、各研究員がそれぞれの研究や構想を紹介した。(主幹研究員／奥村佳代子)

発表要旨

「増田渉文庫蔵・魯迅関係資料の TEI によるテキスト化プロジェクト」

本発表はすでに構築されている関西大学のデジタル・アーカイブをユーザー視点でどうデザインし、発展させるかという問題意識から、すでに公開されている翻刻データを TEI によるタグ付けして公開するという計画について述べたものである。具体的な第一歩として、本学所蔵の増田渉の旧蔵書から、魯迅『呐喊』を選び、本文データと書き入れデータを翻刻し、公開することとした。増田渉は 1931 年上海にある魯迅の自宅で一年にもわたり『呐喊』と『彷徨』の講義を受け、その際のメモが残っており、このメモは魯迅の小説の細部を解説する際の世界的にも貴重な資料となっている。この翻刻データが公開されれば魯迅研究に貢献できると考える。ただこのためには障害があることを指摘している。TEI でタグ付けしたデータができあがっても、ビューワ表示ができなければユーザーが使いやすい形で利用できないことである。この点をクリアすることが今後の課題であるとした。(研究員／石崎博志)

「関西大学附属図書館所蔵する篆隸万象名義近世写本およびその構造化テキスト記述の試み」

《篆隸万象名義》は平安時代初期に成立し、弘法大師空海によって編纂された。これは、日本に現存する最古の漢字の字書である。高山寺本は、唯一の古伝本である。《篆隸万象名義》の近世写本は、東アジアの各地の図書館に収蔵されている。関西大学附属総合図書館には《篆隸万象名義》の近世写本が所蔵されている。《篆隸万象名義》近世写本の書誌調査は、

高山寺本と近世写本の比較研究を進める上で非常に重要な意味を持つ。この発表では、関西大学図書館に所蔵されている《篆隸万象名義》近世写本の書誌調査と、そのデジタル化の状況について報告する。(KU-ORCAS・RA／李媛)

「中国語商業会話書『生意襍話』のテキストデータ作成に向けて」

KU-ORCAS デジタルアーカイブが、中国研究のプラットフォームとして広く活用されるには、固有の資料のテキストデータの作成と公開に早急に取り組み、他のアーカイブとの差別化をはかる必要がある。

明治時代に編纂された『生意襍話』は、御幡雅文（）が上海の日清貿易研究所で学ぶ学生のために編纂したものであると考えられる。管見のかぎりでは、刊本は明治大学図書館と関西大学総合図書館に、写本は北九州市立図書館と KU-ORCAS 鱒澤文庫に所蔵されており、現時点で確認することのできる資料はこれら 4 冊のみである。希少価値の高さから、画像資料とテキストデータが公開されることに十分な意義があると同時に、4 冊がそれぞれ固有の手書きメモや加筆など他にはない特徴を持っているという点からも興味深い資料群である。まずプレーンテキストを作成し、手書きメモや加筆部分をどのように提示するかが課題である。(主幹研究員／奥村佳代子)